岐阜大学機関リポジトリ
Gifu University Institutional Repository

高校入学時における英語文法理解に対する意識調査

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 岐阜大学地域科学部 公開日: 2024-02-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 笠井, 千勢, 長友, 隆志 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12099/0002000488

岐阜大学地域科学部研究報告第 53 号：15-22（2023）

高校入学時における英語文法理解に対する意識調査

笠井　千勢　（岐阜大学）
長友　隆志（宮崎県立都城西高等学校)

A Survey on Understanding on English Grammar in High School Freshman

Chise KASAI (Gifu University)
Takashi NAGATOMO (Miyakonojo Nishi Senior High School)

(Received June 30th, 2023)

1. 研究の背景と目的

近年，新学習指導要領の導入や大学入試改革により，高校における生徒の評価方法や大学入試共通テストにおいて問題の出題方法に変更がなされた。評価方法においては令和 4 年度より、知識・技能、思考・判断・表現、そして主体的に学習に取り組む態度の 3 つの観点から評価がされるようになった（文部科学省, 2019）。大学入試共通テストでは知識・技能である基本的な文法問題の出題がなくなり長文読解が主に問われている。新学習指導要領については、知識・技能の評価項目の中に文法項目はあるものの、実際の試験の中では、文法事項が簡略化されている。アウトプットにおいても、正確性よりも流暢性つまり、文法表現にエラーがあったとしても多くのことを表現すること（英作文中の単語数の多さ）に重点が置かれていると感じることも少なくない。

このような変化の中でも、基本的な文法の習得については普遍的なものであり、英語学習の基本として重要なものである。基本的な文法の理解により、英文読解において正確な内容の把握が可能であり、また、英作文やスピーキングによる表現も基本的な文法理解があってこそ成立するものである。よって、基本的な文法事項について学習し、理解することはリーディングやリスニングにおいて多読や多聴をこなしたり、スピーキングやライティングによるアウトプットをしたりするために必要であり、基本的な文法能力は英語学習の初期段階において生徒に定着させる必要がある。

今回の実践の目的は、生徒が学んできた文法事項に対し、どの程度の理解度があるかについて調査を行うものである。生徒がよく間違える英文法や習得に時間がかかる英文法については先行研究でも取り上げられてきたが、一方で生徒側から見て、ある特定の文法事項に対しどの程度の理解度であるか､つまり文法の理解度に対する自己評価に関する調査は少ない。生徒自身の内面的な英文法の理解度に対する意識を把握することで､英文法を指導する上で、より生徒の感覚に寄り添いながら指導ができるのではないか、また、指導がしやすくなるのではと考える。例えば、生徒自身は苦手意識が大きいが、テストではある程度正確に解くことができる。反対に、得意と思っていたことが思ったよりもアウトプットできないなど、生

徒の認識と実際できることに対し乖離があった場合、それらの状況も踏まえた上で指導が可能であり、よりスムーズに英文法を導入できるのではないかと推察される。

今回の調査では、学習者の基本的な文法に対する理解度について、上位群と下位群の 2 郡を比較しながら分析を行った。上位群と下位群の観点を取り入れることで、英語ができる生徒とできない生徒それぞれに対し、どのように理解度が異なるかを把握し、授業で活用できる実践モデルを構築することを目的とする。理解度については、Bandura（1977）による自己効力感を基本としたアンケートを作成し、調査を行った。

2. 先行研究

2.1 文法に対する高校生の意識と自己効力感

ベネッセ教育総合研究所（2020）は 2019 年 3 月から 4 月に全国 971 名の高校 1 年生を対象に「高校生の英語学習に関する意識と実態」をテーマに自記式質問紙調査を行った。調査の中で学校の学習にかかわることについての意識を調査した結果、文法が難しいと感じている高校 1 年生は 8 割であり、文法の学習につまずきを感じている生徒が多くいることがわかる。これは、生徒が学習に対する自己効力感が低いと予測できる。自己効力感とは、自分の課題に対して「これならばここぐらいまでできるのではないか」という期待感を表すものである(Bandura, 1977)。また、学習に対する自己効力感は年齢を重ねる毎に減少すると言われているため、高校時の生徒では、小学校や中学校の生徒と比較して、自己効力感が減じやすい可能性がある(Jacobs, Lanza, Osgood, Eccles, & Wigfield, 2002)。

例えば､高校 1 年生に文法事項を教えるにあたり､生徒自身はその時々の授業においては、扱った文法内容を理解しているように見えるが、実際は教えている内容がうまく定着していない様子が見受けられる。生徒はテスト前に集中的に学習することで、テスト範囲の文法事項の問題については回答できるものの、テスト後に忘れてしまったり、実際に英文法を使って英文を書かせると、習得した文法事項が反映されない。今回の調査では、生徒が実際に学ぶ英文法項目毎について生徒の意識について「～できる」という形式で自己効力感を問うようなアンケート調査を行い、年齢とともに減じやすいとされる自己効力感がどのように変化するか着目する。

2.2 文法項目別における意識調査

上垣（2018）は、高校 3 年生 105 名に対し①分詞構文、②独立分詞構文、③仮定法過去、④仮定法過去完了、⑤使役動詞、⑥知覚動詞、⑦時制を下げる、⑧現在分詞の後置修飾、⑨過去分詞の後置修飾、⑩不定詞の 3 用法、⑪現在完了の経験、⑫3 単現の s、⑬動名詞の意味上の主語、⑭第V文型、⑮文の要素、⑯原形不定詞、⑰強調構文、⑱補語と目的語の違い、⑲関係代名詞、⑳先行詞を含む関係代名詞、㉑形式目的語、㉒不定詞副詞的用法の 22 項目の文法用語から文法内容がわかるかを判断させ、わかる用語を回答するアンケートを行った。その結果、80 人以上の学生に周知されている用語は、⑩不定詞の 3 用法、⑫3 単現の s、⑲関係代名詞の 3 つであり、その次が①分詞構文であった。それ以降、③仮定法過去⑤第V文型と続いた。周知度の低い用語では、周知度が低い順に、②独立分詞構文、㉑形式目的語、㉒

不定詞副詞的用法、⑨過去分詞の後置修飾、⑧現在分詞の後置修飾、⑱補語と目的語の違いであった。

2.3 文法項目におけるテストの理解度

中條・横田・長谷川・西垣（2012）は中高英語教科書にもとづいた英語基礎文法力テストを試作し、それらを用いて、2011 年に大学 1 年生 164 名を対象に実施をした。これは中條・西垣（2007）の報告によると、ある大学 1 年生の半数以上の生徒が中学レベル（英検 3 級）に達しておらず、大学卒業段階の目標を高等教育段階の目標に置き換える、すなわちやり直し教育（リメディアル教育）が必要であるという理由からである。効率よく英語学習におけるリメディアル教育を行うために、中高で学習した文法力測定テストの作成を行ったものであり、英語検定 2 級、準 2 級、3 級、4 級、5 級とレベル設定し、どの程度の正答率であるかについて報告したものである。中学校文法項目については①代名詞、②名詞複数形、③属格（’s）、④be 動詞、⑤Yes/No 疑問文、⑥Wh 疑問文、⑦比較表現、⑧時制、⑨分詞（後置修飾）、⑩現在進行形、⑪to 不定詞、⑫受動態、⑬現在完了形、⑭関係代名詞、⑮否定形、⑯助動詞、⑰存在構文、⑱it を主語とする構文、⑲接続詞、⑳間接疑問文、㉑how to という合計 21 項目を対象に調査を行った。結果は下記の表 1 であり、名詞複数形、属格（’s）、受動態、間接疑問文について特に重点的な復習が必要であるとしている。

表 1　中学校文法項目におけるテスト結果（中條・横田・長谷川・西垣, 2012）

文法項目		英検級該当者の正答率（%）					平均 正答率（%）
		2	準2	3	4	5	
1	代名詞	97	93	89	80	58	88
2	名詞複数形	83	71	57	37	17	56
3	属格（’s）	89	82	55	12	0	53
4	be 動詞	93	94	91	85	70	90
5	Yes/No 疑問文	91	82	78	61	41	76
6	Wh 疑問文	99	96	92	72	61	88
7	比較表現	94	87	85	54	20	78
8	時制	82	81	67	43	19	66
9	分詞（後置修飾）	94	92	77	60	42	77
10	現在進行形	100	92	78	59	33	78
11	to 不定詞	100	92	83	58	44	81
12	受動態	89	74	64	26	33	59
13	現在完了形	81	75	58	25	11	57
14	関係代名詞	100	93	77	58	50	77
15	否定形	56	70	66	53	29	63
16	助動詞	100	88	78	58	56	79

17	存在構文	100	85	74	20	17	66
18	it を主語とする構文	100	84	68	76	83	76
19	接続詞	100	100	97	87	75	94
20	間接疑問文	78	74	59	32	33	58
21	how to	100	87	74	50	33	73

3. 研究方法

3.1 参加者

本実践研究の参加者は、日本国内で英語を学習する普通科に所属する高校 1 年生 94 名である。本研究のアンケートは 2021 年の 5 月、中間テスト後に調査を行ったものであり、上位群のクラスの生徒 32 名と下位群のクラス 62 名の比較を行った。上位群と下位群は入学前の学力検査により分けられたものである。

3.2 調査した文法事項について

本研究では Baton Pass G2（啓隆社）の文法事項を参考にし、文法事の理解度について対象生徒にアンケート調査を行った。文法事項は下記の表 2 のとおりである。

表 2　調査した文法事項

番号	文法事項	詳細
1	品詞と基本語	品詞の基本、冠詞(a, the)、複数形、単数形
2	英語の語順①	S+V、S+V+C、S+V+O
3	英語の語順②	S+V+O+O、S+V+O+C
4	現在時制（be 動詞、一般動詞）	主語と動詞の一致（3 単元の s を含む）疑問文、否定文
5	過去時制（be 動詞、一般動詞）	主語と動詞の一致、疑問文、否定文
6	進行形	進行形の基本、疑問文、否定文を含む
7	未来時制	未来時制の基本、疑問文、否定文を含む
8	助動詞	助動詞の基本、疑問文、否定文を含む
9	疑問文・命令文	疑問詞を使った疑問文、付加疑問文、命令文
10	動名詞	動名詞を使った英文
11	不定詞①（基本用法）	名詞的用法、形容詞的用法、副詞的用法
12	不定詞②（色々な用法）	形式主語を使った表現、疑問詞+to 不定詞など
13	比較	as 原級 as、比較級、最上級の表現
14	受動態	受動態の基本、疑問文、否定文を含む
15	現在完了形	現在完了形の基本、疑問文、否定文を含む
16	分詞	分詞による名詞の修飾
17	関係代名詞	関係代名詞(who, which)を用いて名詞を修飾

18	接続詞・前置詞	基本的な接続詞・前置詞

3.3 上位群と下位群の中間考査結果

アンケート実施前に表2の各項目の文法項目を混在させた中間テストが実施された。その結果を上位群と下位群で比較したところ、表3のように、上位群の平均は92.41であり、下位群は87.26であった。中間テストの出題内容であるBaton Pass G2（啓隆社）については、入学後から中間テストまで指導を行った。指導時数は15コマ（1コマ45分）程度であり、本誌にある文法事項について解説を行った。中間テストでは上位群、下位群の生徒とも比較的高い平均点であった。こちらの得点については*t*検定により有意な差が見られ、上位群の結果の方が高いということが明らかになった。

表3　指導後テスト結果

上位群（n=32）		下位群（n=62）		*t*(94)
M	*SD*	*M*	*SD*	
92.41	5.80	87.26	6.18	3.91**

3.4 分析方法

今回の本実践では、Baton Pass G2（啓隆社）にある文法事項に沿って中学校卒業までの文法項目の理解度について問うものである。理解度については、5：よく理解できている（自分で英文を作ることができる）、4：理解できている（和文英訳の問題ができる）、3：普通（括弧埋めや選択問題であればできる）、2：あまり理解できていない、1：理解できていない、の5 件法で生徒にアンケートを取った（添付資料 1 を参照）アンケートでは、自分で英文を作ることができる、和文英訳の問題ができる、各国目や選択問題であればできるなど、アンケートの中で具体的な学習達成度を問うことでより、生徒が自分の文法への理解度について可能な限り正確に答えることができるよう工夫をした。

4. 分析結果と考察

表 4 が今回の分析結果である。理解度については、全体的に 4：理解できている（和文英訳の問題ができる）に近い数字であり、生徒の意識としては、自分で英文を作ることはできないが、括弧埋めや選択問題、また、和文英訳であればできるという認識である。上位群と下位群を比較すると、接続詞・前置詞以外はすべての項目において下位群を上回っていた。SPSS による上位群と下位群に優位な差があるかについて確認するため、それぞれの文法項目において *t* 検定を行ったところ、全ての文法項目について有意差は見られなかった。つまり、上位群と下位群において、高校入学後において有意差は見られなかったということである。これはアンケート結果について上位群と下位群において数値においては上位群が全体として少し高いものの中間テスト後 5 月の段階では、上位群、下位群とも、ほとんどの生徒の理解度の意識はほぼ同程度であると言える。

アンケートの結果について特徴的なものを見てみると、助動詞、そして接続詞・前置詞が上位群はそれぞれ、3.66、3.59、下位群はそれぞれ、3.48、3.84 と他の項目と比較する理解度が低い傾向がある。上垣（2018）と中條ら（2012）と比較すると、上垣（2018）の研究では分詞の活用について周知が低いという結果があったが、本実践研究においても特に下位群において分詞の項目において 3.68 という結果から、生徒が苦手であると感じている傾向があり、共通している点であるといえる。また、中條ら（2012）においては、受動態について重点的な復習が必要であるとしていたが、本実践研究においても上位群・下位群ともそれぞれ 3.91、3.68 と苦手と感じている生徒が存在することがわかった。

表4　アンケート調査結果

文法項目	上位群（n=32）		下位群（n=62）		*t*(94)
	M	*SD*	*M*	*SD*	
品詞と基本語	4.09	.73	3.98	.83	.63
英語の語順①	4.34	.70	4.10	.96	1.30
英語の語順②	4.28	.68	4.17	.96	.62
現在時制（be動詞、一般動詞）	4.38	.75	4.24	.82	.80
過去時制（be動詞、一般動詞）	4.28	.77	4.22	.85	.33
進行形	4.28	.89	4.14	.88	.72
未来時制	4.03	.86	3.90	.89	.66
助動詞	3.66	.90	3.48	1.08	.81
疑問文・命令文	4.09	.82	4.02	.91	.41
動名詞	3.81	1.00	3.92	.96	-.51
不定詞①（基本用法）	3.97	.90	3.92	1.02	.23
不定詞②（色々な用法）	3.97	.90	3.87	1.01	.45
比較	4.31	.74	4.10	.93	1.15
受動態	3.91	.93	3.68	1.05	1.02
現在完了形	4.06	.88	4.00	1.08	.28
分詞	4.00	.95	3.87	1.02	.60
関係代名詞	4.00	.92	3.94	1.01	.30
接続詞・前置詞	3.59	.80	3.84	.97	-1.24

5. 教育的示唆と今後の課題

今回の調査では、生徒の自己判断による各文法事項の理解度について上位群と下位群で有意な差は見られなかった。また、生徒全体の理解度についても 5 段階中ほとんどが 4 に近い数値であり、中学の文法内容の復習であったため、文法に対し深刻な苦手意識は調査時点では確認できなかった。テストの結果からも、今回の実践で使用した 17 項目の英文法を重点

的に出題したが、上位群、下位群で有意な差は見られたものの、2 つの群とも数値の上では高い理解度を示していた。今後、授業が進んでいく中で、さらに文法の苦手意識については変化していくと考えられるが、定期的に授業で扱う文法項目について生徒の理解度について把握しながら授業を進め、課題について「できそうな気がする」といったような自己効力感を高めるような指導を行っていく必要があると感じた。また、今回の調査では、テストで各文法項目を出題したが、全体の点数（100）を分割した場合、各項目の出題量が少なかった。各文法項目について、さらに多くの問題数で判断したり、また、全ての文法項目において、英作文を課したりするなど、文法項目がどの程度できるか、そして、それらの文法に対する生徒自身の自己評価による理解度を比較しながら、さらに授業での生徒への指導の仕方や声掛けの仕方を工夫していきたい。

新学習指導要領（文部科学省, 2019）では、令和 4 年度から導入された英語コミュニケーション I において高校 1 年次に学ぶ文法事項を不定詞の用法（名詞的用法、形容詞的用法、副詞的用法）、関係代名詞の用法（主格、目的格、what など）、接続詞の用法（等位接続詞、従属接続詞）、助動詞、前置詞、動詞の時制及び相（現在形、過去形、現在進行形、過去進行形、現在完了形、現在完了進行形、未来表現、過去完了形、過去完了進行形）、仮定法の 8 項目にカテゴライズしている。上記のように、文法項目については、これまで行われてきた実践研究毎によって変わっているが、実際に生徒が学習するコミュニケーション I の科目について新学習指導要領で設定する文法項目を意識しながら、今後重点を置くべき文法項目に細分化し、授業を進めていきたい。

今回、他の研究と本研究を比較も行ったが、それぞれの研究においては、文法事項のピックアップの仕方や、各文法項目への意識、そして文法項目のテストにおける正答率が異なっている。これらの比較については、これまでの学習環境や生徒の個々の能力によって文法の理解度や自己効力感は変化すると予測できるが、多角的なデータを比較することで学習者全体の傾向もある程度明らかにすることができるのではないかと考えている。今後は Google 社が提供する Forms や、ベネッセが提供する Classi のアンケート機能など ICT を利用した持続可能なアンケート調査を取り入れた調査を継続的に行うことで、生徒の学習状況を把握する。

参考文献

Bandura, A. (1977). Self-efficacy: Toward a unifying theory of behavioral change. *Psychological Review, 84*, 191-215.

ベネッセ教育総合研究所（2020）.『高 1 生の英語学習に関する調査』ベネッセコーポレーション.

Jacobs, J. E., Lanza, S. Osgood, W., Eccles, J. S., & Wigfield, A. (2002). Change in children's self-competence and values: Gender and domain differences across grades 1 through 12. *Child Development*, *73*, 509-527.

中條清美・西垣知佳（2007）.「リメディアル教育用英語検定学習教材の試用」『日本大学生産工学部研究報告 B』 40, 47-53.

中條清美・横田賢司・長谷川修治・西垣知佳子（2012）.「リメディアル学習者の英語習熟度と英語熟達度調査」『日本大学生産工学部研究報告 B』, 45, 43-54.
文部科学省．(2019).『高等学校学習指導要領解説　外国語編・英語編』開隆堂出版.
上垣宗明（2018）.「学生の英文法力についての調査」『神戸高専研究紀要,』56, 35-40.

添付資料 1 中学既習事項チェックシート

５：よく理解できている（自分で英文を作ることができる）
４：理解できている（和文英訳の問題ができる）
３：普通（括弧埋めや選択問題であればできる）
２：あまり理解できていない
１：理解できていない

No	項目	自己評価（1～5）	分からないこと・質問・知りたいこと（書ける範囲で）
1	品詞と基本語		
2	英語の語順①		
3	英語の語順②		
4	現在時制（be 動詞、一般動詞）		
5	過去時制（be 動詞、一般動詞）		
6	進行形		
7	未来時制		
8	助動詞		
9	疑問文・命令文		
10	動名詞		
11	不定詞①（基本用法）		
12	不定詞②（色々な用法）		
13	比較		
14	受動態		
15	現在完了形		
16	分詞		
17	関係代名詞		
18	接続詞・前置詞		